

## 涅槃会と涅槃図



上の写真は成田山での涅槃会（2月15日釈迦堂にて）の様子  
貫首は通常緋色（ひいろ）袈裟を着用するが、稀に紫の袈裟を着ることもある。  
緋色の袈裟は大僧正（貫首）のみが着用できる。



紀元前 383 年？（年代は諸説あり）の旧暦 2 月 15 日、仏教の開祖である釈迦が入滅しました。  
今から 2500 年ほど前、仏教の開祖＝釈迦が、最後の教えを残して 80 歳の生涯を閉じました。  
日本では、旧暦の 2 月 15 日とし（月遅れの 3 月 15 日に、この行事を行う寺院も多い様です）  
釈迦の教えや徳に感謝する『涅槃会』という法会が、各お寺で行われます。

## 涅槃とは

梵語で「吹き消すこと」という意味で、煩惱の火を吹き消して心が平安になった理想の境地を指します。煩惱をすべて取り払った悟りの境地の事を言います。即ちお釈迦様が亡くなる時は、その悟りの境地に達していたわけです。

故に、この涅槃会の場合の涅槃は、「お釈迦様が亡くなった」という意味で使われます。

この日は、各寺内に、お釈迦様が亡くなった時の姿を描いた『涅槃図』を掲げて、僧がお釈迦様の最後の説法を記したとされる『遺教経（ゆいきょうぎょう）』を読み、参拝者が礼拝します。頭を北に、西に向いて横たわるお釈迦様の姿を描いた涅槃図は、究極の悟りの世界を表していると言われ、この時のみ公開される涅槃図を拝みに、多くの善男善女が集まります。

元祖興福寺の涅槃会は、毎年2月15日10時から、本坊の北客殿で行われ、

誰でも参拝できるうえ、甘酒の接待も受けられます。

涅槃図には約50種類の動物が描かれています。

「ねずみ」が御釈迦様の使いである為「ねこ」は描かれていないことがほとんどですが作者や依頼主のしゃれで描かれていることもあるが非常に少ないようです。

まずは上部にある

### ●沙羅双樹（さらそうじゅ）の木

この沙羅双樹の「双樹」というのは、お釈迦様が亡くなった時に、その四方に沙羅の木が2本ずつ計8本あったという意味で、沙羅双樹という木ではないわけですが、その花が、お釈迦様が亡くなると同時に、季節外れの花を咲かせ、すぐに散っては、その花びらでお釈迦様の遺体を覆ったと言われています。

青の点線で囲んだ部分が枯れているのに、まだ青々としている木もあります。

成田山の涅槃図も右側の沙羅双樹の木は枯れているようです。

頭北面西（ずほくめんさい） 涅槃像が頭北面西であることから「北まくら」

### ●お釈迦様

中央の宝台の上に、頭を北にして横たわるお釈迦様が描かれていますが、これが「北枕」の由来とされ、右脇を下にしているのは、西方浄土に向かうという意味だとされています。

## 投 薬

御釈迦様が病気になった時、天国から母親が薬袋を投げたことによる。

### ●薬袋（やくたい）

これは、お釈迦様の母・摩耶夫人（まーやぶにん・ふじん）が、病気の我が子のために天から投げたとされる薬の入った袋・・・しかし、残念ながら、沙羅双樹の木に引っ掛かってお釈迦様のもとには届きません。これは、例えお釈迦様であろうと誰であろうと、死ぬ事は免れないという事を意味していると言われています。

現在でも、病院では薬を与える事を「投薬」と言うのは、ここから来ているそうです。

### ●描かれている動物

お釈迦様の周囲に描かれた弟子や、見守る人たちとともに、

図の下の方には十二支をはじめとする様々な動物たちが描かれます。

これは、もちろん「動物たちも、お釈迦様の死を悲しんでいる」という意味で、人だけでなく、生きとし生ける物すべてに慈悲の心を持ったお釈迦様の徳を表しています。

ちなみに、東福寺の物は50種類以上の動物が描かれているようです・・・ただし、鼠がお釈迦様の使いとされている事から、猫が描かれた涅槃図は非常に少ないらしいです。